

僕は自信がなかった。だからお金を稼ぐと決めた。

こんにちは、りきです。

このレポートでは、
僕が大学生の頃にビジネスを始めて、月収100万円になるまでの過程。

そして、それまでに持ってたコンプレックスについて話したいと思います。

では、ここから始めます。

僕は2019年現在、
ほぼ手を動かすことなく月収100万円を手にする事ができている。

大学を卒業して
一度も就活することなく、自分で事業を始めた。

24歳という年齢で、かなり自由度の高い生活を送れている。

しかし、ここまで正直かなり厳しい道のりだった。

僕は、神奈川県の田舎町で生まれた。

家の周りには何も無い。山だらけ。

3人兄弟の真ん中で、上に姉、下に弟がいる。

共に5歳ずつ離れている。

なので、大きくなってからは
特に喧嘩をした記憶はない。

もちろん小さい時は
よくしていたが。

で、僕の父は、
建設会社をやっている。

28歳くらいの時に始めたらしく、
約20年以上その会社を経営している。

母はその会社で事務員として働いている。

従業員は10人以下の
小さい会社だ。

とはいえ、
一応は経営者の息子となるわけだ。

周りからは2代目として
チヤホヤされてた。

その時には、自然と自分も同じ様な仕事をするのか〜
と思っていた。

よく、貧乏から成り上がったみたいな話はあるが、

僕は小さい時に
お金に困った記憶はほぼない。

正直、かなり恵まれた環境だったと思う。

欲しいものも買ってもらえたり、
海外旅行に行った記憶もあるし、
週に1度くらいは外食していた。

しかし、一つだけ他の家庭にはないこともあった。

それが毎日の様な夫婦喧嘩だ。

父と母は毎日のように喧嘩していた。

一緒に会社をやっているので
仕事のことで頻繁にぶつかっていたのだ。

僕の父は
若い頃かなりヤンチャしてたらしく
キレると手がつけられなくなる。

母と喧嘩して、
家の窓から外にテレビをぶん投げたり。

時には自分の家のガラスを椅子で割ったり。

母に手をあげることもあった。

僕はそんな父を反面教師として育った。

母はいつも泣いていた。

シクシクという泣きのレベルではない。

もう悲鳴のような声をあげて
号泣していた。

その時まだ弟は生まれたおらず
僕は5歳上の姉と、父と母が喧嘩するのを見て怖くて泣いていた。

いつものように喧嘩が始まると
2人で2階に上がっていた。

でも母が心配で
階段の影からこっそり覗いていたのだ。

小さかったので
怒り狂った父に抵抗することはできなかった。

「ママをぶたないで」

と姉は泣いていた。

お金に困った記憶はないが
とにかく父と母の喧嘩が絶えない家庭で育った。

僕は母に、
なんで父と離婚しないのかと聞いたこともある。

すると

「あなたたちが大人になるまでは」

と答える母。

「あんな人になっちゃダメだよ」
「心の広い人になりなさい」

と育てられた。

それを聞いて
小さいながら、すごく申し訳ない気持ちになった。

「自分たちのために我慢してくれているんだ。。。」

その時から僕は
とにかく母をもっと楽にしてあげたい。

そう思うようになったのだ。

なので、僕は高校2年まで
母を喜ばせたい、楽をさせてあげたいという思いから
サッカーでプロ選手になることを目指していた。

幼稚園に上がると僕は
地元のサッカーチームに入ることになった。

ただ、その地元のチームはとにかく弱小だった。

試合をすればいつも

0-3

1-5

0-2

とかで負ける。

正直、試合にかかった記憶がほぼない。

でも、試合に負けて終わったらみんなケラケラ笑って
ゲームの話をしだす。

最初は、すごくそれが嫌だった。

試合に負けたのに

なんでみんな平気でいるんだろうと。

ただ、最初はそう思っていた僕も

次第にその間環境に慣れていってしまった。

そんな時、このチームじゃダメだと思った僕は

隣町のチームにも入ることにした。

そのチームは関東にいくつも支部があり、

その支部から選抜された人が
代表チームとして大会とかに出られるような感じだった。

小学3年生の時
僕はその代表チームに入るための
選考会に参加した。

そして合格した。

神奈川、東京、埼玉から集まる
25人の代表チームに入るようになった。

かなりの強豪チームだ。

僕が所属してた地元のチームとはレベルが違う。

常に勝つことが当たり前だった。

そのチームの練習は基本的に土日。

練習場所は、都内だった。

試合となれば
栃木や茨城、千葉、仙台、静岡とかにも行く。

家から車で3、4時間かかる時も普通にあった。

母は文句1つ言わずその全てに送り迎えしてくれた。

朝4時に起きて
僕の弁当を作り、
5時に家を出て、車を運転して栃木とかに向かう。

僕は助手席でいつも寝ていた。

これが毎週末続く。

その時からだろう。

僕はプロ選手になって絶対に母や祖父母を喜ばせると
誓っていた。

レギュラーとして試合に出て、
地域の選抜選手にも選ばれたりした。

毎週末2時間3時間かけて
往復4時間5時間。

母はそんな生活に文句ひとつ言わず
送り続けてくれた。

そんな日々が続き、僕は
中学に進学することになる。

僕の中学は、
地元でもかなり有名な荒れてる学校だった。

原付バイクで通学してくる先輩がいたり、
生徒が先生を倉庫に閉じ込めていたり。

体育館は、闘技場みたいに喧嘩が行われていた。

タバコ、万引きとかは普通な感じだった。

授業中もみんなケータイで当時流行ったmixiとかをやっていた。

そんな中学に進学した僕は、
もちろん先輩から喧嘩に誘われたり、
タバコを強要されたこともあった。

おそらく生意気な後輩だったので、
よく呼び出された。

僕は中学の時、
サッカー部には入らずクラブチームに入った。

もちろん、サッカーでプロになる、

お金を稼ぐと決めていたから
タバコなんか吸っている場合ではない。

授業が終わればすぐに家に帰り、
クラブチームの練習に行く。

そして家に帰り飯を食って寝る。

そしてまた学校にいった練習に行く。

土日は試合。

サッカーのおかげで、
荒れた学校だったが不良の道を歩むこともなかった。

しかし、勉強なんて全くしてなかった。

でも、周りもしてなかったの
で、相対的にそこまで悪い成績はつかなった。

そもそもだが、成績なんて気にしたことがなかった。

なぜなら、プロになると決めていたから。

別にサッカー選手になれば
勉強の成績なんて関係ないからいいや、
と思っていたのだ。

そんな中学生生活も終わり、
僕は高校に進学することになる。

高校は特待生として入ることができ、
私立なのに、学費はほぼ免除された。

やっと、親に恩返しができる。

そう思った。

中学まで順調に来ていた。

ただ、僕はそれで調子に乗ってしまったのだ。

学年に5人しかいない
特待生枠で入ったことで
完全に天狗になった。

最初はレギュラーとして試合に出れていたのに、
高校2年の時になると、
周りにどんどん追い抜かされていった。

そしてその時からだろう、

僕はプロになって
金を稼ぐことを諦め始めていた。

自分にはここが限界かもしれない。

というものの、
高校に入って調子に乗った僕は

全く努力をしなくなっていた。

小学生の時は
チームの練習が終われば
家に帰って、近所の壁を相手に自主練をしていた。

中学生になっても
そんな生活を続けていた。

しかし、高校に入ってから
全くだった。

部活が終われば帰って
テレビを見ていた。

みんな残って練習している。

今考えれば
そりゃ抜かされる。

正直、才能は他の人よりあったと思う。

ただ、努力をしなかった。

だからどんどん抜かされていったのだ。

そして高校2年の時には、

あれだけ強く誓っていた

プロ選手になるという夢もいつしか諦めていたのだ。

自分には無理だと決めつけて。

そして、高校を卒業した。

幸いにも、大学に進学できた僕は
恐ろしいことに気づいた。

俺っていったい何ができるんだ？

と。

今までは、自分の強みはサッカーだった。

100人いれば、この中で
一番サッカーがうまいのは自分だと確信できるくらい。

ある程度、結果も残してきたし、
自分の中でそれが自信に繋がっていた。

でも、今はどうだろう。

何もない。

周りに100人いても、その中で
他の人に勝る特徴が何も。

自分の強みが何もない。

プロになると思っていたから
勉強もしてこなかった。

辛うじて進学できたものの
大学は3流。

ここからどうするのか？

ここまで育ててくれた親にどうやって恩返しすればいいのだろう？

毎日真剣に打ち込んでいた対象もなくなった。

夢もない。

大学1年生の時
僕は本気で将来が怖くなった。

何をしたらいいのかわからなかったのだ。

あれだけ早起きをして、毎週末遠くまで送り迎えして
弁当を作ってくれ、
自分のことを応援してくれていた母。

暴力的だったが、
お金に一切困らずここまで生活させてくれた父。

何を返せるんだろう。。。

何も返せるものがない。。。

とにかく、何か見つけないと。

自分の強みを。

で、思いついたのが

「一流企業に行こう」

ということだった。

今思えば、かなり単純だ。

一流企業に入れば、
給料もいいはずだし。

世間体もいい。

これなら恩返しができる。

で、

「一流企業と言えは商社だな」

そう思った僕は、

商社に入るため何が必要か調べて見た。

すると、どうやら英語力が必要らしい、とわかる。

一度目標ができた僕は早かった。

英語を勉強するなら
留学した方がいいと思い、
留学を決めたのだ。

英語なんて、本当に
「how are you?」
くらいしか知らなかった。

なぜなら、
全く勉強してこなかったから。

勉強してこないというか、必要ないと思っていたから。

なので、大学の英語テストでも
500人くらいいる中で
下から2番目のクラスに振り分けられた。

英語なんて使わないと思っていたので、
強がっていたが、こんな早く必要になるときがくるとは。

英語が全く話せないから
海外に行くのはすごく不安だったし怖かった。

もちろん、1人で海外にいったことだってない。

だから、
空港でトラブルが起きたらどうしよう。

何かの間違いで、逮捕とかされたらどうしよう。

そんな妄想するほど怖かった。

でも、今の自分にはこの道しかないと思っていた。

だから、費用の安い
フィリピンに大学2年に上がる時に留学した。

勇気を持ってフィリピンに来たものの、
本当に英語は全く喋れない。

isの過去形がwasということさえ知らなかった。

外国人講師とレッスンをするときも
何を言っているのかさっぱりわからない。

なので、僕はずっと笑って誤魔化した。笑

何を言われても、
「ahahah」
みたいな感じだ。

相手からしたら
「こいつ絶対わかってねーだろ」
と思われたに違いない。

でも、僕にはそれしかできなかった。

悔しかった。

まともに会話もできない。

そんな自分の無力さに苛立ち、
語学学校の寮で、ひとり泣いた時もあった。

周りの日本人は、
みんな英語を喋って楽しそうにしている。

なのに、自分だけこんな。

惨めだった。

ただ、その時は
愛想笑いしかできなかったので、
かなりほっぺの筋肉が鍛えられたと思う。

毎日の5時間以上のマンツーマンレッスンで
愛想笑いをするので、本当に疲れた。

何を言ってるのかわからないし、
友達もいない。

そんな状況の中で2週間が経ったある日。

なんかこの人、こんなことを言いたいんじゃないか。
というのがわかる様になってきた。

あ、電気を消していいのか聞いているな。とか

あ、今夜飲みに行こうと言っているな。とか

このくらいの会話が理解できる様になってきたのだ。

もちろんそれまでの期間も
僕は単語を調べたり、
文法を学んだり、

今まで勉強してこなかった分の
穴を埋めるために努力していた。

最初は全くわからなかった0の状態が
やっと10くらいになったのを実感したのだ。

同じ語学学校に通う韓国人とも
コミュニケーションが取れる様になってきた。

3週間がすぎると、
自分の言いたいことも伝えられる様になってきた。

会話が楽しくなってきた。

飲みに行こうと誘うことができる。
今日何しているの？と聞ける。

自分でも信じられなかった。

how are you?しかわからなかった僕が、
外国人相手に英語を喋っているのだから。

英語を喋って
相手を笑わせることができている。

めちゃくちゃ楽しかった。

自分には無理だと思っていたことが
できている。

僕は、この英語が全くできない状態から
日常会話ができる様になるという成功体験を得て、

大きな自信を手に入れた。

無理だと決めつけるのは
本当にもったいないことだ。

できないのは
今までやってなかっただけだ。

そういうマインドを手に入れた。

2ヶ月間の留学から日本に帰ってくると
見える世界が明らかに変わっていた。

2ヶ月前は、
自分にはなんの強みもないし取り柄もない。
と悩んでいたのに、

今は英語が話せるという
強みがある。

この1つの強みだけで世界が変わった。

これで商社に入れる希望が出てきた。

そう思っていた。

しかし、違った。

僕はあることに気づいた。

お金を稼ぐために商社に入るのに、
商社に入っても

20代の間は、給料は安い。

増えても月収30万とかだ。

30歳になれば
給料も上がり、確かに
それなりの生活はできそうだった。

でも、その間にも
自分が恩返ししたい
両親や祖父母は、生きているのだろうか？

別にそんな保証はどこにもない。

小さい時僕の相手をして
サッカーの練習に付き合ってくれていた祖父母。

もう80歳になる。

自分が30歳になる時には
もう90歳だ。

正直、そこまで生きていてくれるかわからない。

両親だって、もう50歳だ。

10年経てば60歳。

その間に、何が起こるかわからない。

30歳になって旅行に連れて行ってあげる経済力があつたとしても
もし病気になって入院していたら

そんなことも叶わなくなってしまう。

そんなことを考えていた。

せつかく英語はできるようになったが、
商社に就職しても自分の目的は達成されない。

そう気づいた。

それよりもっと早く結果を出して、
もっと早く経済的に余裕を得ないと意味がない。

30歳になって、お金があつても
意味がない。

もうこの3年。

なんなら1年間で、結果を出したい。

焦っていた。

それが大学3年の時だ。

それから僕は就職という選択肢を完全に捨てた。

周りが就活していく中、
僕は自分で事業を始めることを決意したのだ。

そして自分で事業をスタートして、約1年で
僕は会社の部長並みの収入を得られるようになった。

今では、月収が100万を超えている。

それにこの収入は僕が手を動かすことなく毎月発生する。

一度夢を失って、
自信喪失した僕が
ここまで来れた。

たった1年だ。

これから約70年80年ある人生の
たった1年でここまで来た。

サッカー選手になって
恩返しするという目標の代わりに
ビジネスで恩返しできるようになった。

このレポートを読んでいる人の中には
僕より過酷な状況の人もいるかもしれません。

「諦めるな」とかいう言葉は
綺麗な感じがするので本当は使いたくないですが、
やっぱり大事です。

最後まで読んでくれてありがとうございます。

僕の経験や
成功までの過程や方法を発信している
LINEマガジンもぜひ楽しんでみてください。

感想もお待ちしています。

では、以上です

ありがとうございます。

[無料LINEマガジンはこちら](#)

